

随

筆

白き桔梗ききよう

井 口 鐵 介

高校に入って最初の国語の時間に、先生がこんな質問をされた。

『諸君は中学の卒業式で「仰げば尊し」を歌ったでしょう。その中に「今こそ別れめいざさらば」という一節がありますね。「別れめ」とは何ですか』というのであった。私たち新入生は色々に考えて答えた。

『裂け目、割れ目のように二つのものが左右に分離する意味で、今日こそ先生と生徒、あるいは友達同士が別れていく境目の日だ、という意味ではないでしょうか』

『金の切れ目が縁の切れ目という言葉があります。金の切れる時が縁の切れる時だ、ということですから「別れめ」は「別れる時」のことだと思えます』様々な意見が出た後で、先生は次のような話をされた。

『諸君はこれから、「源氏物語」や「徒然草」など古文を勉強しますが、その時に「係り結び」という約束があります。「ぞ・なん・や・か」など強めや反語の助詞があると文末は連体形で結びます。「こそ」がくれば已然形で結ぶのです。勧誘や意志や推量を表す「む」という助動詞は、終止・連体・已然形を「む・む・め」と活用します。「こそ」という強調の助詞を受けて、「む」は「め」になります。ですから「別れめ」は「さあ今こそ別れよう」という意志を表すのです』

漱石の小説『門』の主人公宗助は鎌倉円覚寺に参禅した。境内の一隅にある帰源院で、宜道という若くて親かな僧の世話を受け、十日間ほど宿泊しての修行であった。釈宗演老師から「父母未生以前本来の面目は何か」という公案を与えられた。宗助は苦しみながらも何とか考えをまとめ、老師の前に出てそれを述べた。しかし、老師は『もつとぎろりとした所を持つて来なければ駄目だ』とその返答を一蹴してしまった。

若き日の漱石の参禅は実体験であったようで、そんな縁からか、帰源院の庭に漱石の句碑があり、このように刻まれている。

仏性は白き桔梗にこそあらめ 漱石

この句には「帰源院即時」という前書きがあり、『漱石俳句集』に収められている。前述のように、「こそ」があるので推量の「あらむ」が「あらめ」に変化する。

仏性——人間なら誰れもが持つている仏様のような慈悲の心——は、きつと清浄な白い桔梗の花の如きものであろう、というのである。

芥川の『蜘蛛の糸』に犍陀多という人を殺したり家に火をつけたりする極悪人が出てくる。ある時、彼が深い森の中を通ると、道端に一匹の蜘蛛が這って行くのが見えた。彼は早速足を上げ踏み殺そうとしたが、『いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ』と思い直し、殺さずに助けてやった。どす黒く濁った犍陀多の心の中にも一輪の白い花が咲いたのである。

蝶の道

市川 光 治
(文芸光風)

庭を通り過ぎる、いろいろな種類の蝶は、ここを過ぎたあと、どこへ行くのだろうか。

思いついて、一頭のキアゲハ、のあとをつけた。拙宅を出るとその蝶は向かいの家の広い庭は素通りし、その隣の空き地に入った。ひなげしやハルジオンや名も知らぬ雑草の小さな花の周りを飛び回ってから、一気に公園まで飛んだ。

公園を出ると、ひとブロックさきの墓地に入った。墓地にはツツジが満開である。墓地をぬけると隣の広大な屋敷に入った。これでは諦めるしかない、と思っていたら、塀のずっと先のほうから蝶がでてきた。同じ蝶かは分らないが、ともかく見ていると、道路を渡って反対側の畑に入り高く舞い上がって、桜の太い古木の周りを回っている。

この桜は白い花を付ける。葉と幹の様子から明

らかに桜と分るが、花の時期がソメイヨシノに比べて一ヶ月は遅い。従って葉がかなり茂ってから、花が咲く。それゆえ花は葉の陰に隠れ、華やかさはまったくない。

しかし、花が散り始め、木の下に花びらが溜まり始めると、それらは薄い桜色を呈しているのがわかる。散った花びらはまさしく桜なのである。

蝶は散り残った花の周りをゆらゆらしていたが、ふいと上昇し、青空の中にまぎれた。そこで私は蝶を見失った。

かわりに、桜木の影の散った花びらの中に立つ、黒っぽいワンピース姿の麗人を見つけた。女は小さな花束を片手に持ち、バックを肘にかけたまま、しばらく木の上を見上げていたが、やがて私のほうへ歩いてきて、横をすりぬけ、墓地のほうへ歩き去った。

彼岸は疾うに過ぎたし、盆はずっと先だと思いながら、私は女の後ろを歩いていた。墓地の中の屋敷との境界は庭木の陰になっている。女はその影にむかい、影の中を塀に沿って歩き、とある墓の前に額づいた。誰かの命日なのか。白い顔が墓石の影に隠れた。

女の顔が見えなくなったので、私が視線を塀の上に戻すと、そこにクロアゲハがすっと飛んできた。木の陰のなかから湧いたようであった。黒い蝶は影の中を飛び、また影の中に消えた。

ふと気づくと、黒服の女が墓石の陰から立ち上がって、消えたクロアゲハのほうへ歩いて行った。墓地の先の角を曲がって、女の姿も消えた。

— ドラマチックな秋 —

(生きていることが感動の連続!?)

いつでもハッピー

白いテーブルクロスを買った。光沢があって、地の模様があり、とても素敵だ。ライトがあたると、レフ板効果で、ぱっとそこだけ明るくなり、部屋はなやいだ。

ずっと欲しくて探していて、ようやく横浜の元町でみつけた。新婚当初からの、古いダイニングテーブル。一枚布を掛けただけで、おもてなしの雰囲気

がただよ。これでお客様が来ても大丈夫かな？

ピンクのバラのアレンジメントを飾る。初めて、息子が彼女を連れてくると言う。きっと、可愛い人なんだろうな？

今から、ドキドキだ。

春に娘が出産して、男の子が誕生した。我が家にとって、嬉しい出来事となった。何をしても見飽きない。小さな手。あくびをしても、伸びをしても可愛い。出産してしばらくは、食事を多めに作って、毎日のように小田原までJRで通った。心配したが、おかげ様で母乳が良く出て、音が出るくらい元気に飲んでくれる。ニコニコとごきげんな赤ちゃんだ。娘夫婦も協力して、忙しいながらも楽しく子育てをしている。幸せそうで、安心した。

三〜四ヶ月には、首がすわり、寝返りが始まった。おもちゃを握り、音を確める。

現在六ヶ月をすぎた。ずりバイをしている。そのうちハイハイをするのでは？と、目が離せない。本当に成長が早い。表情が豊かになってきた。手足が活発に動く。

私も、絵本を読んだり、歌をうたったりと楽しく

孫育てをしている。お気に入りの絵本もできたみたいだ。これから、たくさんさんの言葉を耳から聞いて、覚えていくのだろう。

南図書館で、読み聞かせのボランティアを始めた。まだまだこれからだが、紙しばい、手あそびなども楽しんで覚えたい。

藤沢に引越してくる前も、歌が好きでコーラスを続けていた。コロナ感染も落ちつき、楽しそうなグループをみつけて入会した。

素敵な先生と仲間恵まれて、楽しく練習している。今回、藤沢市民オペラ「オテッロ」の合唱に挑戦。夏から仲間と共に練習に励んでいる。

「おなかから声を出して。もつと深い声で。」厳しくもある指導の先生のお言葉に、身が引きしまる。まだまだ上手に歌えない。毎日録音やCDを聞いている。

隣に座った方と仲よくなり、定期演奏会の招待券を頂いた。ありがたい。勉強になると感謝した。自分だけ、できていないのでは？と不安になる。でも、他の団の方との交流は楽しい。少しずつ前進したい。

オテッロの物語の舞台はベネチア。30年前新婚旅行で訪れた。ゴンドラに乗ると本当に船頭さんがカントーネを歌ってくれた。美しい水の都だった。せつない愛を思いながら暗譜をがんばり素敵に歌えたらと願っている。

私とウクレレ

梅澤輝也

長年勤めていた会社を退職した時、“これから、これまで出来なかったこと、やれなかったことを…”と、思っただけの事なのにウクレレがある。気軽な気持ちで始めたが、この四弦の小さな楽器は、音楽の基礎知識から和音の仕組み、コード進行など色々と教えてくれている。

ウクレレは、ハワイアン音楽の脇役的伴奏楽器として知られているが、最近ではラテン、シャンソン、演歌からポップスまで、さらにベートーベン第九・歓喜の歌までも演奏され楽しまれている。

ウクレレの元祖はポルトガルの楽器、ブラギーニャと云われている。ハワイ王朝第七代カラカウ王はブラギーニャの名手エドワード・プルビスを度々宮廷に招き演奏を楽しんだ。小柄なプルビスの“綽名”が、あるいはフレット上の“素早い指の動き”が、ピョンピョン飛び跳ねる蚤を連想させ、これを表現するハワイ語の“ウク・レレ”が、この楽器の名称の由来と云われている。王朝最後の第八代リリウオカラニ女王は、この言葉を同音異義語で「恵の贈物」と詩的に解釈した。

私とウクレレの足取りを振り返ってみると、心に残るものが多々ある。ウクレレを習い始めるとハワイへの関心が次第に高まり、ハワイに行きたくなった。そこでハワイ州知事とホノルル市長に手紙を書いてみた、ありきたりの観光ではなく養護施設などでウクレレ訪問したいと。驚いたことに直ぐ返事が来て訪問先を紹介してくれた。早速、仲間を誘いハワイ諸島の施設を数か所訪れた。三味線を弾く幼馴染も同行してウクレレとコラボもした。日系老婦人のベッドの傍で、共に『故郷』を口ずさみ涙して別れを惜しんだ。現地のウクレレ仲間とボツ

ラック・パーティーで親善交流も楽しんだ。

このほか、カムカム英語とウクレレの不思議な縁、テムズ河畔ヘンリでのウクレレ・オーケストラ、眼の不自由な少女との出会いなど、いろいろなことが多々ある。

最近では、音楽仲間のイベントに併せて、私の九十歳パーティーを催した。それぞれのグループの演奏の合間に、私にサプライズの贈物を戴いた。私の好きなバラの花束、記念のTシャツ、これまで関わった活動のスナップ写真と書き、そして後日、当日のスナップアルバムまで戴いた。

いみじくも、リリウオカラニ女王はウクレレを「恵の贈物」と読み解いた。私の手元のウクレレは、これまで多くの素晴らしい人々との出会いと、貴重な体験を与えてくれている。

もう暫くウクレレと共に楽しく、歓びを感じながら生きて行くことにしよう。

終り

負けない諦めない

大和田 三代子

(はまゆう)

「負けない、諦めない」ということを最近の自分への戒めの言葉としてしている。それは他の人との闘いではなく、自分の精神的心の弱さに対してである。

ある人の「負けない人生」の話を聞いて、自分の心の弱さを感じたし、諦めることを潔い、相手に対する思いやりと考えていた。だが最近、エッセイを書いて自分を見つめるようになって、自分がいかに弱いか客観的に見えるようになった。少し前、息子に「九十歳まで頑張って生きる」と言ったところ「なんだ、今は百歳まで生きる時代だぞ」と言われ、自分の性分が弱いのかと思った。

最近、デイサービスに行くようになって、先日七夕かざりをした時に「健康で元気に百歳めざしてガンバリましょう」と書いて笹にぶらさげた。

また隣りの席の年配の方で「もう何時死んでもい

い」と言う人に「弱音をはいちゃだめ、まだまだ頑張りましたよ」と言っている自分がいた。

いつのまにか「負けない、諦めない」と自分に言い聞かせるようになっていた。

令和五年八月十一日

問題付きお年玉

香 霜 小太郎

ぼくには4人の孫がいる。いちばん上が男で下の3人が女の子だ。

孫には小1で千円、以降1学年ごとに千円ずつ値上げしてお年玉をあげている。でも、ただあげるのではつまらないから、多少の知的刺戟を与えることも考えてお年玉に「問題」を付け加えることにした。元日に電話で解答をもらい、正解なら先に送ったお年玉は自分のものになるのだ。問題が難しければ親などにヒントをもらってもよいことにし

た。それもあって、今まで正解できなかったことはない。

例えば、小1の問題。「すずめがでんせんに23わとまっていました。てっぽうでうったら9わがおちました。のこりはなんわですか」。算数上の答えは14羽。ただし音におどろいてのこりは全部飛び去ったので実際は0羽。

小学生も中ほどになると、例えば、「次の○の中に動物の名前を入れなさい」。「○にかつおぶし。○寝入り。○に真珠。○も木から落ちる」。

さらに小学生高学年では、過去の「全国統一テスト」からも一部拝借した。

中学生になると、例えば、「次の語呂合わせは何を意味するか」。「人並みにおごれや」。「富士山麓ふもとオウム鳴く」。そして孫たちはいずれも東京在住なので、神奈川県かながわの統一テストからも一部拝借した。

高校生になると、例えば、「拙訳の英語の元になる有名な和歌、俳句を推定し、またその作者も答えなさい」。

(A) I hope to die under the cherry blossoms
in spring around the time of full moon in February.

(B) A little sparrow get out get out of the way. A horse is about to pass.

それと、健康上「要支援」になった家内が通っている施設でもらった問題、例えば、「次の文字を並び替えて意味のある言葉にしてください」。(A)ははぶめちんら。(B)うんしきよこん。(C)ほちうこんうお。(D)いろだんしこお。を付け加えた。

なお、高3では各大学入試の過去問から一部拝借した。

いちばん上の孫が昨年難関大学に合格したのはうれしい限りだ。

しかし、ばくも高齢になり問題を考えることにくたびれてきた。なにしろいちばん下がまだ小2なのだ。それと、高校や大学入試問題などを相手に出す以上は内容を一応理解しておかなければいけない。

今後は、孫が成人になるまでお年玉は出すが、「問題」はもうおしまいにしようと思っている。

失火

加藤 寿子

炭になった数本の柱が、焼けただれた屋根を何とか支えていた。実家を全焼させてしまった。一昨年の暮れのことだ。九十三歳の母が、「見たら台所が真っ赤になっていた。とっさに中へ飛び込んで焼け死んでしまおうと思った。」と煤だらけの顔で言った。その時はまだ、悪夢を見ているようだったのだと思う。

私は独り暮らしの母の世話を焼きに行って、汚れのこびりついた鍋に水を入れて沸かし、それを庭に撒いて捨てていた。戻るとガスコンロの奥から炎が上がっていて、奥の隙間に油が染み込んだ紙でもあり、それが勢いよく燃え上がっているのだと思った。洗い桶に溜まっていた水を一気にかけた。しかし、炎はさらに天井の換気扇に向かい火柱が立った。換気扇のコードには油污れがこびりついていてパチパチ音を立てて燃え、青い火花が散って

いる。私は外へ逃げた。濡れたシーツを被して空気をさえぎれば消える、と教わったことなどすっかり忘れていた。

母は庭で里芋を洗っていて、「早く消防を呼んで！」と叫び、近所の人が通報してくれた。十分後には消防車が到着して消火できたように見えたが、次の瞬間ぱっと音を立てて火が一気に家全体を包み込み、全焼した。

交番のお巡りさんが、水溜りができた庭で「何か夢のお告げとかなかったものかね？」と私に聞いた。確かに火事の夢はよく見た。消しても消しても、また燃え出す庭の木。金属のガードレールから炎が上がっていて、ホースで水をかけても消えない。寝入り端に綱のような不快な物に自分の体が捕えられて回転させられ、身動きできず苦しんでいる夢。私自身が認知症になる予兆なのかも知れない、と思っていた。「毛に火のついた猫が縁の下に飛び込んで来て、火事になったことがあるそうだ。早く家へ帰って、火の元の用心をしなさい」と私は幾度も母に諭されていた。私が年齢の割に白髪がなく若々しい母の髪をカットした時、「私は今何も不満

がなく幸せだ」と言ってくれた事が心に焼きついている。

火事の原因は、バルブが壊れて生ガスが噴き出したことだった。私が棚にガラス瓶を置きそこねて落とした時に管の繋ぎ目に当たり、外れてしまって、形だけ繋がっていたのだ。

『禍福はあざなえる縄のごとし』私は諺をよく知っている。世の中の諺を全部知っているくらいだ」と母は言った。しかし諺が精神の救いになるわけではない。気丈に振る舞ってくれていたのは東の間で、最近では、「いつまで私はこうして生きているのだろう」と嘆くようになった。

私は励ます言葉を思いつかず、困ったように笑い、「あと五年、百迄生きて」と言うけれど、生きていても母の心の中は悲しみが巡る。大きな炭のようになつていった柱は跡形もなく片付き、私は以前の実家の様子を、少しも思い出すことができなくなっている。

百日紅

久保田 文子

(はまゆう)

照りつける太陽に向かい、天を突く勢いで咲き誇る百日紅。冬に見るその幹は、ゴツゴツしていてまっ黒。しかも枝だつて枯れてるのかなと思わせる。

しかし、春になるとちゃんと枝先から芽を吹き、花をつけ、初夏の頃には競うように賑やかに咲き出す。すると、何とあの幹が、ツルツル、ピカピカ、羨しいほど実に美しい。

「猿も滑る」ので「サルスベリ」と名付けられたそうだが、滑って登れない猿は一匹もいないとか。

足引きの山のかげちの猿滑り

すべらかにても 世をわたらばや

(藤原 為家)

滑りながらも負けじと生き抜いていくのは人間のほうであろうか。

散れば咲き 散れば咲きして 百日紅

(加賀 千代女)

咲き散った枝先から、何回でもまた再び芽を出し花をつけて咲く。台風も何のその、秋の半ば過ぎまで、実に百日もの長い間咲き続けるので「百日紅」「ビヤクジツコウ」と呼ばれるのだ。

大庭にある百日紅の並木道が好きで、私は車でよく走る。

天を突く百日紅
今年もみごとに

咲き並んでいます

おふみさんがんばれ！

あなたの声が聞こえます

私のことを「おふみさん」と呼んでくれた今は亡き大先輩のお宅には、大きな大きな百日紅の木があり、毎年ピンクの美しい花を咲かせていた。そこからつながる大庭の並木道。

かつて明治市民センターでの五行歌会のサークルで、私はこの五行歌を詠み、沢山の励ましを送ってくれた大先輩のことを熱く語ったことがあった。

その歌会もコロナ禍で再開することなく、この

春、二十年の歴史を閉じた。メンバー一人一人の人生の輝きが詰まった歌の数々を残して。そんなことはお構いなし。今年も百日紅は、ピンクや白、紅、紅紫、色とりどりに元気いっぱい咲いている。

花言葉の中に「雄弁」「愛嬌」とあるが、よくわかる。枝先に群がる華やかな咲きっぷりは、確かに盛んにおしゃべりしているように見える。

今は亡き先輩方、五行歌はじめ多くの仲間たち、家族や親戚、友人たち。出会ってきた人たちを思えば、みんなの笑い声や歌声、騒がしいほどのおしゃべりが聞こえてくるのだ。

青空を拭いて白し百日紅

(紅谷 芙美江)

テラスモールに続く並木道は白色。揺れる白はとても涼やかで散歩するには気持ちよい。

私はこの夏も、あなたの魅力にすっかりとりつかれているのです。

わたしは孤独

小池 貴瓊子

『孤独』という言葉はびつたり私に当てはまっている。私の為にある言葉のよう……。幼少期は祖母両親姉妹弟と七人の家族で貧しさの中にあっても寂しい事はなく、のんびりと育った気がする。尤も出生した時期は、太平洋戦争真っ只中で恵まれない盛りで、母乳の出ない母だったので赤ん坊の時は、栄養失調でミイラのような目バカリギョロ／＼して骨と皮の惨めな赤ん坊で母の姉妹に気味の悪い赤ん坊だったとよく言われていた。そんな惨めな／＼赤ん坊が傘寿を過ぎても生きてること自体奇跡で本人も不思議で／＼ならない。小学校の頃は成績も良く、友達からも信頼されて、小二～小六迄はクラスの級長に選ばれて(役立たずなのに)結構いい気になりまあ／＼幸せといえた。段々に大人に近づき、まわりの友人も全てがよく見えてきてか？ 人氣も下火になり友人も減って、常に淋しいさみしい青春時

代を送つて来た。そして今傘寿を過ぎて歩ける内は独りが一番楽、相手に氣を使わずにすむので……。よく／＼考えてみたら所詮人は皆孤独の中に生きて、そしていつかはあの世とやらへ旅立つ身で、全ての人平等に与えられている命に限界があるという事だ。独りは淋しい反面自由がある。自分の思うように勝手に動ける。但し万一の時は誰も助けてくれる人がいないので、それこそ『孤独死』きりないの趣味方となる人が確かにあつて欲しいと希う。

この世で唯一心許せた昔の恩師は、昨年の暮れ、96才の人生を全うして去つて了つた。

恩師への感謝の念は決して忘れていけないので春と秋のお彼岸には墓参り丈はして来た。

恩師は『千の風になつて』という唄を好んでいたので『お墓の前で泣かないように』と綴つて送つて下さつたのはまるで遺言のよう……。

千の風になりあの天空を吹き渡つて見守つてくれる亡き父と母そして私が一番心を捧げた恩師のことは忘れず、私は孤立化の中でも、強く逞しく負けずに命の限り生きてゆく覚悟だ。独りでも淋しくなんかない。強がりでもない。私は独りが好きだか

ら……。大好きな本を読んで過ごしてる時間が、日々ととうとうと流れてゆく。唯白内障の目の事、真珠腫の右耳のことが心に引つかかるけど……。

自由奔放の時がすごせるといえ、本音はやはりさみしいものだ。独りぼっちの余生なんて、でもこんな老後を迎えたのも、私自身の選んだ道なので自責の念にかられたり又己を省みようという心が欠ける面もあり結局やはり拳句の果てに我が身を責めつゝ、この世の終りを迎えるきりなさそうに思える。生まれて来て良かったと思える幸せな一生を送りたかつたのに……。与えられた宿命を生きぬこうと決めた。残り少ない余命を自覚して尚も愚かな私は生きている。時には奈落の底に堕ちてゆくような淋しさに襲われるけど……。それを乗り越えて生きて行く事は大変だけれど、頑張る他ない今の我が身が隣で哀しい。

おわり

「日本のメディアの責任とは」

榊原 百合子

晩夏の季節から、故ジャニー喜多川の性加害問題が、テレビ、ラジオ、週刊誌でにぎわせる報道が、日増しに多くなった。

おや、と思った。私は米国生活を少しばかりしたのでおかしいな！性加害、性の表現がこれで良いのか？ジャニー喜多川の行為は残忍なる犯罪だ。だからこそ、性加害ではなく、外国の報道機関が伝達する様に、「性的虐待」と変えるべきであると思う。

この報道の始まりは、イギリスのBBCだった。そしてその発言に「日本のメディアは長年沈黙を繰り返していた」とあった。

まったくもって恥かしいことだ。

不正義がまかり通っていたのだ。長年にわたって、みてみぬふりが、実態を説明しようとは思わなかったのか？利害関係がある為か、責任は重い。

メディアは、しばしば、萎縮する。忖度する。沈

黙する。

メディア、政治、企業、のゆちゃくもあるだろう。日本は、ジャニー喜多川の性虐待問題で国際的に注目をあびているが、正しく向き合わなければこれからの日本の未来はない。

ジャニーズのブランドで内容のないタレントが、キャスターとして、堂々たる意見をいつているのを、テレビでみて、とても、ちんぷな思いでいた事も事実だった。

勿論、海外でも、セクハラ、性的暴行、が問題になり、闇があかるみに出た事もある。

華麗なる世界を維持、加担してきた一面もある事も確かだ。

このメディアの問題は、ジャニーズだけではない。福島第一原発の処理水の海洋放出も、もっと真じめに、むきあって、透明性を前面に出していかなければならない。

原発は国策であり、国と、東京電力の努力が何よりも大切だ。そして、それをメディアが正確に、国民に報道すべきだ。日本のメディアは安心だ、安心だと。私は原発の事故の発生した福島ではなく、神

奈川県民だから、処理水の海洋放出は関係ないから飲めるはずだと思えば、思えるのだが、それが思えない。

生水はいまだ熱を加える。生魚は、いまだ煮るか焼くのだ。心理的に放射性物質への抵抗は消えないのだ。

メディアの仕事は、国民に正確に、早く、安心を伝達する事だ。

ジャーニー喜多川性虐待問題や、福島第一原発処理水海洋放出問題も、日本のメディアの報道責任が問われていると思う。政治、靈感商法、高額献金で問題の世界平和統一家庭連合（旧統一教会）の件は、メディアの責任に加えて、長い事に渡っての政治家の責任は重いと同時にメディアの責任は決して許すべきではない。

鵜外の遺書

自 然

森鵜外の眠る三鷹の禅林寺に行ってきた。駅から十五分ほど、立派な門を入ったところに、鵜外の有名な遺言書の石碑があり、原文筆致のままに刻まれている。

「余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ加古鶴所君ナリココニ死ニ臨ンテ加古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死ノ別ルル瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セント欲ス森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ榮典ハ絶対ニ取リヤメヲ請フ手續ハソレゾレアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス」

要旨は「私は石見人森林太郎として死んでゆきた

い、墓石には中村不折の書にて『森林太郎墓』とのみ、それ以外は一字も彫ってはいけない。宮内省・陸軍など関係先はいろいろあるが、栄典など一切お断りする」といった潔い内容であるが、なにか含むところがあるようにも感じられる。口述筆記ではあるが悪文であり、文豪らしさが感じられない、よほど容態が悪かったのか。この遺書については人口に膾炙され、さまざまな見解が述べられている。

「官僚として長年の鬱屈した不満」「長州閥への恨み」「爵位が授けられなかった屈辱を回避した」「一種の被害妄想」「無一物で死ぬという気概」「文学者であることの宣言」「しがらみに縛られて生きて来たことへの不満」、等々、著名人であるが故の評論がなされ、晒しものにされた感がある。

死に際、彼は自らの人生を振り返っていた。神童として勉学に明け暮れた幼少時代、若年での東大医学部入学、陸軍軍医としてドイツ留学と活躍、現地女性との恋、帰国と彼女の来日、「舞姫」発表、日本女性との結婚、離婚、再婚、五児を得たこと、日清日露戦役への軍医部長として従軍、米飯食を推進し戦死者を上回る脚気病死者を出したこと、海軍との論

争、小倉左遷、逍遙との文壇論争、キタセクスアリスによる戒飭処分、軍医総監就任、文学博士、医学博士、帝室博物館総長、膨大な著作物、戦いのような日々であった、そして望んだ爵位はついにかなわなかったのだ。最後に発した言葉は「馬鹿らしい！」であつたそう。

しかし今日、誰もそんなことを知らないのだ。「森鴎外」の名は明治日本を代表する文豪として燦然と輝いている。軍人であつたことなどどうでもよい。「森林太郎 who?」そんな時代になつているのだ。ペンには剣より強し。

すっかり短日となつたなかで、文豪の墓石に向かい合つたまま、わたしは静かな斜陽の中にあつた。森林太郎先生、安らかにお休みください。

「デイ」リハビリを楽しく

篠原貴子

(はまゆう)

Sさんから紹介されて、デイリハ「ひまわり」に通いだしてから二年になる。

デイサービスに通っている人もいるが、デイリハは午前と午後の通所リハビリである。車での送り迎えは玄関先までで、とても有難たい。顔見知りになった人達との挨拶も、コミュニケーションの始まりだ。スタッフの若い人達が笑顔で迎えてくれる。荷物を持ってくれたり、手を取って歩行を助けてくれて中へ入る。年を重ねるとこんなにも車の乗り降りが大変になるとは、予想もしなかったことがある。

毎回席が替り、自分の名前のある所定の椅子に座る。午後二時やや顔ぶれが揃ったところでスタッフが交代でラジオ体操が始まる。そして部屋に並ぶマシンにそれぞれ案内する。

黒板には順番が書いてあり、手際良く運動が進む。待ち時間はほんのわずかだが、頭の体操を兼ねてのプリントが配ばられ、それぞれが挑戦している。私はどうも苦手替りに用されている大人の塗絵を何枚かもらう。

油絵のように色鉛筆で色を重ねながら塗っていくと良く出来ているのを自分でも発見する。パズルの書き方を教えてくれた九十二歳の男性が私の塗り絵を見て注文してくれた。運動の合間をぬって作製する塗り絵が評判になり注文してくれる人もいる。その絵を部屋に飾っておいたところ、「私の作品よ」というと「ほんとう、うそでしょう」とにこにこ話してくれるのも嬉しい限りである。

ある日私をじっと見ている人がいて「どこかで逢ったような気がする」という。マスクをはずしたとたん、「篠原さんじゃないの」とYさん。ダンスサークルで一緒だったフラメンコの名手だ。私はソシアルダンス。数年前のことを二人で思い出して、大いになつかしんだ「こんな所で逢うなんてと」。

週二回身体を動かした日は寝付きもいいようだ。いろいろな人が通って来ている。あつという間の

二時間である。あれから十数年もたつと事情も違つて来ることを感じる。

黙つて時を過ごす人、出逢つた友達と世間話をしてながらそこそこ女性にはぎやかだが、男性の声はあまり聞こえてこない。若い時はさぞもてただろうと思うおしゃれな男性に声を掛けてみると「いや有難とう」の返事。次の週からはにこにこ向うから挨拶を交すようにもなり、それぞれの人生の来し方を見せてもらっている。

生れる子どもの数も全国で八十万人を下廻り、老人の数はますます大きくなつていく。自分の体調は、自分が一番良く知っているように体調を整えながらこういう社会資源も上手に利用して認知症予防にもつなげてゆきたい。「只今」と玄関を入ると嫁礼子さんの「お帰り」との声が暖かく包んでくれる。

さあ今日も百歳めざして頑張ろうと自分に言い聞かせての出発である。今私八十七歳楽しい事に挑戦しながら明日に向つて進んでいこう。

「赤の極^{きわ}み」に魅せられて

澁谷 恵子

題名を何にしようかと迷いましたが、九谷焼赤絵細描の第一人者である福島武山先生の作品集のお名前を使わせていただきました。

偶然九谷赤絵の具を手にしたのがコロナ禍になつた時期と重なり、正に赤の極みに魅せられた様に、ここ数年没頭しています。

先日は、昨年続き、福島武山先生のお嬢さん福島礼子先生の、干支の置物の龍に赤絵細描をする講座を受けて来ました。

昨年のお兎も白磁に赤絵の具で描いた文様が可愛いらしく、今も玄関に、リヤドロの花々やお嬢さん達と楽しげに並んでいます。

一緒に並べても、どちらも優しい色合い雰囲気です。調和しています。

前日より遠足前の子供の様にわくわく、でも手に負えるかしらと少し不安な気持ちにかられて、東京

の有楽町にある金沢のアンテナショップに出かけました。

当日は、大分余裕たっぷり到着しました。

今年の龍の置物と、初対面の感想は、これはなかなか手強いぞと思いました。高さもあり、一時間半では、どうかな、がんばるしかない、と、持参したマイ筆と、老眼鏡を徐ろに鞆から取り出します。昨年は、老眼鏡を忘れてしまい、四苦八苦しました。

まず、礼子先生に、基本の描き方をお聞きして、自己流になっているところを反省。

そして、平面でなく、立体なので、どこから描いていくか順番を確認し、白手袋の、指先（右手の親指、人差し指、中指）を切った物をはめていよいよ開始です。

自分で落ち着いてと思いながら、アドバイス通り平面の広い側から描いていきます。

下描きは、薄赤で入れていたでいてるので、その上に筆に九谷赤で文様を描いていきます。途中お隣りで可愛い形の小皿を描いている方とお話したり楽しく描けました。

描いた文様は、まず麻の葉です。産着の文様に託

した子の健やかな成長など、日本独創の文様だそうです。その姿が麻の葉に似ているのが由来です。着物の柄として、歌舞伎の衣装から大流行となったそうです。人気浮世絵師が女の人の着物柄として描いています。

次に描いた文様は青海波せいがいはです。どこまでも続く波模様、雅楽の舞曲が名の由来です。青海波を踊るための装束の一部に波文が使われていて、光源氏と頭中将が美しく舞うシーンでも有名だそうです、私もお気に入りの文様ですが、きれいに描くのは大変です。

予定の時間を過ぎて、二時間位かかりましたが、完成する事が出来ました。

楽しい、とても充実した時間でした。

途中で、礼子先生の能美市の紹介もありました。お礼と、次回の講習をお願いして講習会場を後にしました。

実は長い年数西洋絵付けを学び描いて来ましたが、今は「赤の極み」に魅入られて筆を取り、窯にらめっこする日々を送っています。

「ウエッジウッドのマグカップ」

島 田 成 夫

(文芸光風)

いよいよ秋も深まり庭の花は少なくなつた。柿の葉が色づいてきた。今年は2019年に続いて「ラグビーW杯フランス大会」がある。週末の新聞を読む楽しさが多い。毎朝、新聞を読みながら、野菜と果物と「ウエッジウッドのマグカップ」で紅茶を飲む。

このカップは、私が定年退職するとき同僚のT・M子さんがプレゼントしてくれた。Tさんとは同じ職場で一年しか重ならず、教科も違ったためにほとんど話しをする機会も少なかった。

退職の日は、同僚や教え子に囲まれて賑やかに職場を去ったために、Tさんにどのようなお礼をしたのかも覚束ない。毎朝カップで紅茶を飲みながら少し気になっていたので、退職後20年たった2022年3月、Tさんにお礼状を改めて書いた。壊れるこ

とも、縁が欠けることもなく、20年間毎日使い続けてきたことを。

Tさんからすぐお礼の手紙をいただき、また暖かい膝掛けを送っていただいた。

私は今年82歳に成り、重い病を罹っているが、現職の時、退職後たくさんの人々に巡り会え豊かな日々を過ごせたことをとても幸いに思う。先日、城山三郎「辛酸」を読み、連れ合いと公害の始まりになる「足尾銅山」「渡良瀬遊水池」「谷中村史跡ゾーン」と田中正造」を巡ってきた。一泊二日の短い旅だが、各処で、親切・丁寧な説明を受けてとても有意義な旅だった。

帰ったら9月28日の朝刊に、阪神地区の「水俣病申請者を全員認める判決の記事」があった。弱きものの、小さなものに寄り添うとするような判決を心地よく読みながらマグカップで今朝も紅茶を飲む。

この旅をもつて最後にしよう。まだ行きたいところはたくさんあるが、もう悔いはない。

これからの季節暖かい紅茶の入ったマグカップを両手に包むと暖かい、心も温まるような感じがする。

ウエッジウッドのマグカップで紅茶を飲みながら、毎朝新聞を読み、一日が始まる。限りある時間になってきた。一日一日心地よく過ごしたい。

父の思い出(その一)

白石 多美子

(はまゆう)

父のふしぐれた暖かい手を思い出した。野菜売場で、ししとうを買いおとしたら、父の手の思い出が蘇った。ひとつは、私が小学生で学校を休み、昼休み工場から帰りながら、畑に寄ったらしく、「多美子めずらしい野菜作ったら、今日が取り頃でたくさんとって来たよ」と父の両手に一杯、私もはじめて見る、とうがらしをブックと大きくした野菜。父も名前を知らないが楽しそうに、「洗って焼いて食べよう」なぜか母はいなかった。父がお昼の支度をしてくれ、ストーブの上にその野菜を全部のせ焼けるのを待つ間、どんな味なんだろう辛いのかなと見つめ

てると、「焼けたよ」とお皿に正油をたらしのせてくれた。父が食べるのを待った。父が美味しそうに食べるのを見て、少しずつかじってみたら、辛くなく、肉厚のちよっぴり辛く少し甘味があり、お昼の一品となり二人で全部食べてしまった。ピーマンという名は、大人になってから知った名前だった。

父の趣味のひとつは、ダリヤの花を育てることだ。ダリヤ畑になって、誰にも触らせない。真っ赤な大輪のダリヤ、可愛いポンポンダリヤと何種類もあるのに、めずらしいダリヤがあると聞くと見に行つて種イモを交換してくる。大事そうに父の手にかかえられ、子供達に見せ講釈する父の顔は楽しそう。秋になると冬越の為全部掘り起こして丁寧にわかし大きな木箱のモミがらの中に名前を書いて、一個一個父の手は更にやさしくダリヤの種イモを、埋め込む。私は父の手をずっと見つめている。父に頭をなでられ暖かった手。

今ももっとも父といろんな話をしたかったと思つた。まだ父との思い出が思い出されたら書き続けたいと思つている。

ななかまど

杉 山 榮 子

(はまゆう)

もう三十年も前のこと。私は盛岡駅で寝台列車を待っていた。

盛岡駅から電車で一時間ほどの友人の家で時間をとられ、盛岡から発車する上りの列車に乗り遅れてしまったのだ。最終は夜行の寝台列車しかない。乗り遅れた列車のキップは買ってあったが使えなくなってしまった。寝台車の切符を改めて買い藤沢迄の旅費を計算すると、財布にはわずかにしか残らない。

空腹に耐えかね、駅前のコンビニでおにぎりを二個買った。心細い思いでコンビニを出た私は、美しい樹に気がついた。名札がつけられている。「ななかまど」と。

三浦綾子とか原田康子の小説には、その実がステキに書かれていたのだが、北国に生きる樹のよう

で、今迄見たことがなかった。

「ああこれが『ななかまど』か」。赤いサンゴのネックレスが大木にまわりついているようだ。枝の間から、まんまるい月が照らしている。

実は藤沢に、体の不自由な子供と、やや酒乱気味の夫を残して、男と暮している友人、T子の家に行った帰りだった。

「この人と暮していたいの帰りたくない」。

「子供のM子ちゃんが、かわいそうだと思わないの」。

「子供には申し訳ないと思うわよ」。

泣きわめくT子の前で数時間、耐え難い時間を過した私は疲れきっていた。

ななかまどと、月、うつとりする時間が流れ、あおむいていた首がだるくなった。そして、T子の最後の言葉、「榮子ちゃん分ったよ、身を切るほど辛いけどね、この人と別れてM子のとこへ帰るよ」との言葉を信じようと思った。

あれから何年も後の冬、長男に次女が生まれた。

「名前をつけて下さい」という。長女は夏に生まれたので、夏紀とつけた。次女は、冬に生まれたので

「ふゆみ」がいいと夫がいった。私はためらわず「冬実」と漢字をあてた。

あの夜の「ななかまど」のような娘に育ってくれるようにと思いを込めたのだ。

「ななかまど」の下で食べたあの夜の二個のおにぎりは、コンブとオカカだった。

終

わが母の記

須田 とし子

「人生 生きてりや色々あるけど何でも前向きに捉えた方が自分も周りも幸せなのよ」とは、生前の母が口グセのように言っていた言葉だ。

振り返ってみれば母の人生は子供の私から見てもかなりの苦勞の連続だったように思う。20才で愛媛の果樹農家の長男（私の父）の元へ嫁ぎ大姑・小姑・夫・私達子供4人の大世帯をグチもこぼさずいつも笑顔で切り盛りしていた。盆や正月には20人超の親

戚の人達が来て寝泊まり。小学高学年以降の私は、この状況を見て我家の家計はパンクするのでは？と本気で心配したものだ。それでも大勢のいとこ達と遊ぶのは楽しかった。

お客様が見える度に私も母の横に正座して三つ指ついて「遠方からよくいらつしやいました。どうぞお上り下さい」と出迎えた。

母は私の祖母ともとても仲が良く、季節毎の行事や来客時には料理や和菓子作りの段取りや手順などを二人で相談し乍らやっていた。

母が45才の時に父は48才で病死。祖母亡き後も父方の親戚の人達が母を慕ってよく会いに来てくれた。そんな母はコロナ禍一年目の2020年12月に92才で死亡。都市部ではコロナがどんどん拡大中だったが地方ではまだごくわずかの時期。そのためきょうだいからは帰省を断われ、一周忌にもコロナ蔓延でやはり帰省出来なかった。

私は母の死を実感出来ず泣いてばかりいたが三回忌にはやっと帰省しお墓参りも出来て私の心の中でひと区切りつき落ちついてきた。

私は今74才。夫は病死して早や26年が経つ。息子

二人は共に最良の伴侶を得て各々、子供にも恵まれてみんな健康で仲良く暮らしている。私は長らく一人暮らしだが健康に感謝しつつ沢山の友人にも恵まれて趣味や旅行、ボランティア等に忙しい日々を送っている。

今の幸せがあるのはいつも優しく笑顔を絶やさなかった母、たっぷりの愛情をシャワーのように注ぎ続けてくれた母、人間としてとても大きな母の存在があったからだと思う。

母は口グセのように言っていた言葉を実は自分にも言い聞かせていたのではないだろうか……。そしてこのプラス思考で人生のあらゆる荒波を乗り越えて来たのだろう。

母は自分のうしろ姿を通して生きる道しるべを私達子供に示して口グセの言葉通りに体現した偉大な人。

母の真の強さとしなやかな生きざまを想う時、今でも溢れる涙とともに、慈愛に満ちた眼なざしと母の口グセの言葉はずしりとした重みと輝きを放って今も私の胸の奥でこだましている。

もう帰ろうよ Ⅱ 秋

相 州 散 人

はじめて俸給がもらえるようになったとき、大きなウーファアの付いたコンポを買いました。もう半世紀以上も前のことになります。そのとき選んだLPレコードはブラームスの弦楽五重奏曲でした。わたくしのクラシック音楽の好みは、秋の森のなかの小道をたどるような情緒であると知りました。

随筆を書くこととするとすぐに秋を思い浮かべます。それは秋の深まりゆく風情に惹かれるだけではなく、七十年前の秋の深夜に母と永遠の別れをしたという重大な契機がからんでいるのだと気づきます。

長生きするつもりもなく今に至りました。そうなったのは何ごとも自分の努力によって究めることなく、人さまの後から見よう見まねで無理をしないで生きてきたからであると思います。それを運根鈍と言った人もいますが、わたくしの場合にはまことに

お恥かしいかぎりですが、単なる怠慢でした。

それにもかかわらず今なお生きていられるのは、女性たちがわたくしを大事にしてくれたお陰だと思っております。最近俳句に興味を持つようになり、或る秀句について牽強附会の言を為すの類の随想を書いて、母性に脱帽という結びにしました。それも幼い頃からの母の記憶に見守られ、励ましを受けているのだと、わたくしの人生観を吐露したのでした。なにごとく功罪半ばするものであり、そこには母によつて植え付けられた万能感とその罪過とも言うべきものもあると承知しております。

「もう帰ろうよ」という随筆を『文芸ふじさわ』に載せていただいてから七年経ちました。それを執筆した頃を振り返りますと、子どもたちが成長して家を出たから家内と二人きりの人生になったとか、或るとき「もう帰ろうよ」と家内に言葉をかけた自分自身の声にわたくしを幼時へ退行させるようなものを感じて、このようにして自分の人生は締めくくられてゆくのだとしみじみとした、と書きたかったようでした。

そして今は、わたくしに尽すために生れてきたか

のような人生になっている家内に、如何に応えるかと腐心するほかには実効性のある行為をわたくしは為し得ないのだという思いを記さなければならなくなりました。

ここで本当は何を表明しなかったのかと振り返りますとき、わたくしが言葉に出そうとする衝動は何であつたのか、ということに逢着しました。述べ立てる言葉の傍らに真実があるのであり、言葉はもろもろの情感に付きまとわれているから、なかなか本当のことが言葉になり難い、迂闊に真実を語つてはならない、わたくしはプロの物書きではないのだ、という認識に至りました。

ファウストを読み返して、わが人生の秋も深まっているのに何事かと、溜め息が出ます。

名古屋だっちゃ

高橋 章 夫

名古屋は首都でもないのにわたしのなかでは、非常に大きな関心を寄せる街に他ならないのだ。

実質的な広さもあるけれど、日本人特有の気質によくあてはまっている。例えばイタリア人はパスタにあんかけを入れないだろうし、欧米の人はトーストに小倉あんを乗せないだろうから日本文化はクリスマスとかバレンタインデーとかにも寛容で、イスラム教徒であっても程よい距離でヒントをくれる。

わたしは地方民ではないので、その問題には答えることが出来ないが、中心部の名鉄名古屋で降りると、毎日行かない人はその人の多さに驚くと思うのだが、八つもの路線が交叉するのだから当然といえは当然なのだ。さらに新幹線の停車駅ともなっていて、乗り換えやどこかの目的地に向かう人と人同士、ぶつかりそうになりながら歩いている。

しばらく歩いて百貨店の方に出ると、ネット

ニユースでも有名になった「ナナちゃん人形」が見えてくる。巨大な人形だけに様々な人の思いが込められているような表情をしていて間近で見ると、ホッとするのだ。

いつだったか中日ドラゴンズの試合を観戦する日、休憩しようと市内の喫茶店に入り、注文したら頼んでもいないヨーグルトがおまけについてきて、ほっこりしたのである。名古屋の空気に誘われてお昼はあんかけスパゲティにしようか、味噌カツ丼にしようか、手の形がちよつとグロテスクな感じだが手羽先をたべようか迷うし、名古屋のラーメン屋で一推しなのが「寿がきや」さんで、濃厚だけれども爽やかな辛さが後をひいてまた食べたくなって、近場の食品売り場で寿がきやの袋麺を探しに行くのだ。ふくろを抱えて夕暮れの町を歩いていると、博多とか、大阪等の大都市を思い出す。コロナ騒動が全世界を覆って世の中のあらゆる事がひっくり返った世の中で、恐ろしさのあまり引きこもりになって都市そのものがゴーストタウンみたいな感じになってしまつて、「この世の終わり」かと思えるほどに大変化に驚いたのである。マスクや体温計がごっそり売れ

た。それこそ生まれて初めての体験である。

わたしも地方に足を延ばして旅行する人が少ない時期だったが、神社に参拝することがとても意義のあることというのが、当時はあまり声に出して言えないことだったが、わたしには必要なことだったのだ。引きこもりの人を見ると哀しくなる。全国の学校でも、登校せずにオンライン授業が主流となってしまった。会社等でもズーム会議とか、メールでのやりとりがコロナから身を守るひとつの方法と言われた。益々人と人が優しく接することが難しい時代になった。それよりは自分に優しくなりたいたいものだ。

図書館徘徊

竜田孝則

受付カウンターで手続きをすませ、何やらいwakがあるという鉄の階段を地下書庫へ降りていく。目的のフロアの踊り場には、薄明るい照明がついて

いる。その先には、暗闇が口をあけていた。一歩足を踏み入れると、古書に特有の一種かび臭いような香りにつつまれ、自分のいるブロックだけが点灯する。視界は、明かりが届く範囲だけだ。あとは漆黒の闇に沈んでいる。歩を進める度に点灯し、通り過ぎたところは、間もなく消灯する。目的の書棚に到達し、書名に見入っていると、突然消灯した。動きが感知できないからだ。突然、視界を奪われると、一瞬、自分が書庫のどこにいるのか分からなくなる。とにかく広い。しかし、見渡せないため、全体のイメージがつかめないのだ。体育館くらいはあるのだろうが、壁面が見えないため、正確には分からない。身じろぎをすると、瞬時に点灯するが、出入口から離れた所にいると、位置が分からなくなる。そこで闇雲に動き回ると、ドツボにはまる。それこそ彷徨するしかない。

が、救い主は必ず現れる。時折現れる図書館員だ。図書館員の移動にしたがって、光のブロックが跡を引くように移動してくる。そこで、出入口の方向も分かるというものだ。

その日も、資料を探して書庫をあてもなく徘徊し

ていた。ふと、興味深い本を見つけ、床に座り込んで読みふけっていると、いつものことではあるが、明かりがふっと消えて闇の中に取り残されてしまった。闇の中でかび臭い香りに包まれていると、あゝこういうのいいなあ、としみじみ思ってしまう。そんな思いにふけっていると、思いもしない方向から、光の帯が近づいてきた。

「いかなぞ、これは。これじゃあ、闇に潜む怪人になつてしまうじゃあないか」

急いで身じろぎをしたが、なぜだか点灯しない。気持ちにはあせるがどうにもならん。こいつは困った。光はどんどん近づいてくる。すぐ隣のブロックまできた。だが、なぜか私のいるブロックは点灯しない。もうだめだと思つたとき、誰かが私の横をふつと通り過ぎていった。かすかにダンヒルの香りがした。この香りには覚えがあった。同じ製品でも、つける人によって香りが違ってくるものなのだ。そう、この香りを嗅いだとたん、T山さんの面影が「(注)ふいにむせびあげるようなつかしきで胸をおそつてきた」。そう、T山さんは、先年他界したのだった。あゝ、もう二度と会えないのか。亡くなる、という

のは、こういうことなのか。

ふと、亡き母タマエの句が思いうかんだ。

「失ひし 日々なつかしや 春の雨」

だけどころか、人は亡くなつても、いろんな形で残るものなのだなあ、とも思つた。

(注) 瀬戸内晴美『京まんだら』(下)

312頁から尊敬をこめて引用。

「教団の解散命令請求に於ける懸念」

富 安 千鶴子

安倍晋三元首相が山上徹也に殺された。そして、「統一教会」がクローズアップをした。現在名称は「世界平和統一家庭連合」となっている。

国家は解散命令を法的に裁判所に請求した。しかし、これでよいのだろうか？ 過去にオウム真理教と明覚寺が、解散させられた。

だが、オウム真理教は、地下鉄サリン事件、弁護士一家殺人事件、公証役場所長殺人事件、数々の事

件を起こしたが、法的には解散になったが、宗教の自由とやらで、「アレフ」、「ひかりの輪」、「山田らの集団」と後継団体は構成員をもち生き残っている。明覚寺もしかりだ。

弘法大師空海といえどオールジャパンの神聖なる和歌山県高野山で、明覚寺は詐欺事件をおこした。法的には解散となったが、結果は宗教活動を一部している者がいる。要するに、解散とは法的に税金支払いの優遇を無にするという限定的処置だけであるのだ。

考えれば、考える程おかしい。霊視、靈感商法、占い、先祖供養、健康食品、経典、仏像、壺、等々を超高価なる金額で売りつける。更には献金を超高額にさせるのである。

おまけに、目をつけた、田地畑を根こそぎ、個人信者から取りあげる。念書は、当然のことながら、すすんでの献金だとする。

悪質である。うさんくさい教えを、疑ってみなければいけないと私は思い、めぐらすのである。宗教、信仰とは、人間を大きく支配する怖さがあると思うのだ。この「世界平和統一家庭連合」（旧統一教会）

の問題は、解散命令だけですませてはいけない。長年に渡り、自民党、岸信介元首相と、文鮮明教祖が手を握り合い、密接な関係を築き、保持し続けた、どす黒い闇は、深すぎる。首相が合意をし、会合出席をすれば、教団には、「お墨付き」を与えてきてしまふのだ。教団の力が、選挙の力と重なっていったのだ。民主主義の根幹にか、わる重大な疑惑をまねいているのだ。

自民党の中央、地方に至る議員がとりこまれていたのだ。政治家の責任は重い。先日、言論の府の長として、細田博之前衆院議長は、説明責任も果さぬま、健康を害したとの理由で、議長をやめた。岸田首相も、自民党も擁護し続けている。会に出席して、相手へのリップサービスで、「安倍首相に、今日の会の事をすぐに報告するといった」との弁は、私達国民に対して、まったく無礼なる行為であると私は思うのである。解散命令を法的に請求したからといって、これで終了は許されない。説明はこれからだ。説明しなければ被害者救済にはならないのだ。正体を隠し勧誘は百数十件に達しているのである。裁判所は、教団の財産の保全をし、被害者救済にあ

てられる様全力を注いでほしい。自民党は選挙票はしさに、拡大を招いたのだ。幕引きは許されない。徹底的調査で疑問を解明してほしい。私は今後注視していきたい。

宮前の市民農園で野菜作り

中 岡 裕 志

今借りている宮前の市民農園は、J R東海道線の新駅予定地にある。

「湘南アイパーク」のバス停でバスを降りる。東海道線路下のトンネルをくぐる。

出ると湧き水の水溜まりがある。以前は、ここで子供達が「沢蟹さわがに」を捕まえて遊んでいた。「不法投棄禁止」の立て札が立ってからは遊ぶ子供もいなくなった。

五十坪の田んぼから、一斉に、三十羽ほどの雀が飛び立つ。この田んぼは、春先に、おばあさんが腰まで浸かって稲の苗を植えていた。今年も豊作で

ある。

株式会社神戸製鋼の右側に市民農園がある。この市民農園は、一区画・二十平方メートルの畑が六十区画ある。私はその一区画を借りている。

今収穫しているのは、オクラ・ナス・ピーマン・パブリカ。十月には、落花生らっかせいが採れそうだ。白菜・レタス・カリフラワー・芽キャベツは、苗を植えたばかりである。

今日は、ホウレンソウと春菊はるきくのタネをまいてきた。タネとタネの間を一センチメートル程度にすじまきする。水をたっぷり与えた。

野菜を育てる楽しさは、収穫の喜びにある。

土づくりから始めてその時々ときどきの追肥・水やりを欠かさず行くと良く成長する。

私は「少量多種」を心がけている。

右隣のAさんは、山形県出身。左隣のBさんは、介護士をしているらしい。

帰りは、地層のある鎌倉道を歩き、裏山から入り「宮前御霊神社みやまごりやうじゆ」をお参りする。

宮前御霊神社は、天慶三年（九四〇年）村岡城むらおかの平（村岡五郎）良文よしふみが、甥の平将門たいらまさかどの討伐と国家安あん

穩を祈願して山城国洛中（京都市上京区上御霊前通）の御霊社（祭神早良親王）を勧請したといわれている。

のちに鎌倉権五郎景政を合祀した。

その後正嘉年中（一二五七から五九）北条時頼の命により葛原親王、高見王、高望王を合祀し五座となった。

数ある境内社の中に「疱瘡神」がある。

鎌倉権五郎景政が勧請したという。

平安時代の「続日本紀」によれば、「疱瘡は天平七年（七三五年）に朝鮮半島の新羅から伝わったとある。

当時は外交を司る太宰府が九州の筑前国（現・福岡県）筑紫郡に置かれたため、外国人との接触が多いこの地が疱瘡の流行源となることが多く、太宰府に左遷された菅原道真や藤原広嗣らの御霊信仰とも関連づけられ、疱瘡は怨霊の祟りとも考えられ恐れられた。

参道沿いに、Hファームがある。

春になると、Hファームのイチゴの直売が始まる。みずみずしくて甘い。楽しみである。

市民農園は、おじいさんやおばあさんの憩いの場所なのである。

桜とウグイス

ネ コ ス ケ

今年の桜は、異例の早さで開花しました。コロナ禍で自粛していたお花見も徐々に解禁され、桜も一日でも早く咲きたかったのかもしれない。

桜が咲き始めると、冬の間は控えていた引地川親水公園の早朝ウォーキングを再開します。以前お会いしていた方達とまた一緒に頑張ろうと、元気を頂く季節の始まりでもあります。

私の家の東側にも桜の木があります。ちようどの頃、近くでウグイスのさえずりが聴こえ始めます。冬が苦手な私にとって、桜とウグイスは春の訪れを知らせてくれる嬉しい存在です。

春先のウグイスは「ホーホケキョ」と上手く鳴けずに練習しているようですが、それがまたかわいく

て仕方がありません。

桜が散り葉桜となり、初夏を迎えてもウグイスは鳴き続けます。この頃には鳴き方は、はつきりと「ホーホケキョ」と聴こえるようになっていきます。

今年の猛暑の中でもウグイスは、セミと共にお盆過ぎまで鳴き続けていました。その澄んだ鳴き声に癒され、一時でも暑さを忘れることができました。

ウグイスは、一体いつまで鳴き続けるのでしょうか？
秋になると他の場所に移動してしまうのでしょうか？

ネットで調べてみると「ホーホケキョ」と鳴くのはオスのみで、パートナーとなるメスを得て、子育てを始める八月から九月頃までこのさえずりをするそうです。その後、秋から冬にかけては、ほぼ同じ場所でおス、メス共に、「チャッチャ」と鳴くとのことです。ということは、今でも近くにいるのかもしれませんが。

しかし、ウグイスの姿すら見たこともなく「チャッチャ」の鳴き声を聴き分けることもできません。今はただ来年の春まで元気でいてほしいと

願うばかりです。

そしてもう一つ、春先に上手く鳴くことができない訳は、ノドの筋肉が関係していることが分かりました。

それは暖かくなりノドに筋肉が付き、練習を重ねてようやくあのさえずりができるようになるからだと思います。

ウグイスもよいパートナーを見つけて、子孫を残すため努力をしているのが分かると、来年の春先の鳴き方がより一層、愛らしく聴こえてくることでしょう。

フィットネスの生活化

長谷川　ドリー

1964年東京オリンピック前後に社会体育指導に専念した頃、フィットネスという目新しい言葉が北米から導入され、その未知の概念に戸惑いながらも新たな興味を覚えていた。その後、シカゴイン

ターン留学の機会が与えられ、当時フィットネスの実践活動を展開していたシカゴ市内17のYMCAで多様な研修を受けた。その節、第二次世界大戦終了直後に運動生理学者のクラウス・ウエーバー両博士が、戦禍で破壊され尽くし劣悪な生活環境で暮らすヨーロッパ各地の青少年の健康実態調査で基礎体力テストを実施した。現地の子供達は食糧不足の中で通学のため瓦礫を越え、否応なく長い距離を往復し、日々の生活を通して必然的に身体活動を余儀なくされ、その結果、自然に身体的負荷が継続され、体力テストでは予想外の93%の高い成果が現れた。次いで調査団が戦勝国の米国の青少年でも同じ体力テストを実施した結果は、高度な生活文化を享受し、飽食と運動不足と肥満による体力低下していた米国の青少年は僅か43%しか成功しなかった。この調査結果がアイゼンハワー大統領に報告され、未来の国防を担う青少年の体力低下の実態に憂慮した大統領は直轄の体力強化対策を組織化し、伝統的なバスケットボールやバレーボールを生み出したYMCAに青少年の体力強化事業が委託され、1950年代に全米にフィットネス運動が組

織化していったことを知った。国際的にも1960年代にはミュンヘンオリンピックを契機にトリム運動として、国民の体力づくりが急速に拡大していった。日本でも東京オリンピック直後に国民体力作り審議会が組織化され、それまでのエリートスポーツ観戦のみの受け身状態から脱皮して、自己参加型の社会体育が急速に広がり、ジョギング、テニス、スキー、水泳、ヨガ、エアロビクス、サイクリング、フラダンス、などがブーム化し、都市部には新たなフィットネスジムが続々と開設され、健康文化を取り込んだライフスタイルが定着してきた。私は1970年にフィットネスの起業化を試み、いつでも、どこでも、誰でもできる健康づくりの出口を始めた。エプロン姿で参加できる身近な場所ので、体力作りを求める人々に専門指導員を派遣するというシステムを構築した。昨今の社会構造の変革でデジタル化が先行し、インターネットを通して多彩なスポーツ文化がSNSに流れサポーターの熱狂的な興奮が毎日のように伝わってくる。ただ観戦の興奮を生かしながら、同時に個々人が積極的な健康作りに結びつき、個別の身体機能に応じた

フィットネスを生活化され、より良い健康生活文化の維持改善に結びつく契機となることを願っている。健康は全てのものから自由で、いかなる規制や拘束も受けず、揺籃から墓場に至るすべての人々が、たつた一度の人生を完全燃焼するために、多様な暮らしの中にフィットネス活動を取り込んで欲しいと願っている。

「行く雲の」

畑 昌子

ゆく雲の行方は知らず一葉落つ 昌子

「文芸ふじさわ」のおかげ様で心の向くまゝを書き記すことが出来る。

今生も又戦争、人の殺し合い、欲の張り合ひ。まったく心の置き場のない日々である。

——。私の小さな畑では茄子、ピーマン、コスモスは好き勝手に咲いている。青菜があちこちに——。何といい加減な畑だろうか？それでも燦燦と光輝く

風の中倒れるまゝに咲き、実り、種茄子の隣りに小さな子茄子こなすを連れまだ青々と花を付けまだ頑張れますよと語っている。草を払えば去年植えた芹が畑を占居している。「これかわいいうち戦争ね。」空にも地にも愛すべき神は在します”

なんという文化の日だろう

人々が何が大切かをわすれないよう

ちゅうちゃん第5話カブトムシ

ハムスター

（創作絵本の会「えほんだな」）

ある夏の日、正義の味方、町の人気者、ノラ猫ちゅうちゃんちゅうちゃんが町を歩いています。ネズミみたいな名前だけど猫なんです。ちゅうちゃんは人間とお話ができますませんが、動物とお話ができます。

「今日は暑い。今までで最高に暑い。暑いと言わないようにしよう。でも言っちゃう。暑い、暑い。水を探さなくちゃ。水、水。」

そうだ、3丁目のあの娘のところがいいな。いつもきれいな水を洗面器に入れて置いてくれるもんね。

おや？先客がいる。ハチさんだ」

「あれ、しまった。助けてー」

ハチは水を飲もうとして、洗面器に逆さまに落ちて溺れています。

「あつ、ハチさん大丈夫？いま助けるよ。

ばくを刺さないでね。

もう大丈夫だよ」

「ありがとう。ちゅうちゃんは命の恩人です」

「いたっ」

「ご免なさい。つい癖で刺しちゃった」

「いいよ、いいよ。気にしなくて。これくらい。

洗面器の水をこぼしちゃった。やれやれ、水を飲みそこなった。

他を探そう。あつ、あそこに池がある。暑さで干上がってるぞ。

水は底にちよつぴりだ。しまった、わーっ」

ちゅうちゃんは池に転げ落ちていきました。

ザブーン。

「でも大丈夫。やつとこさ水が飲めた。

あれ？背中に何か固いものが。わーっ、大きなカブトムシのはりぼてだ。ずいぶん長く池に沈んでいたんだね。だいぶ錆びてる。

でっかい落とし物だ。重いぞ重いぞ。よいしょ、こらしよ、どっこいしょ」

ちゅうちゃんは大きなカブトムシを背負って池から引き揚げます。

「わあつ」大きなカブトムシが現れたので子供を連れてお母さんがびっくりしています。お母さんからはちゅうちゃんがカブトムシに隠れて見えません。子どもはちゅうちゃんがしっかり見えているのでニコニコしています。

「落とし物を交番に届けよう」

今度は、交番のおまわりさんがびっくりしています。

「何だ、何だ？」警棒と盾を構えながら、「怪獣、おとなしくしろ！

なーんだ、ちゅうちゃんか。怪獣かと思ったよ。カブトムシの落とし物を拾ったのかな？これから落とし主を捜してみるよ。お手柄、お手柄」

おまわりさんは、ちゅうちゃんを優しく撫でまし

た。ちゅうちゃんは撫でられるのが大、大、大好きです。

まぼろしの林田金作蔵書印文庫

林 田 繁 雄

子供の頃を振り返り、あれは、何んて恵まれていたのだろうと思うことがひとつある。

世界文学の「ベニスの商人」「罪と罰」「ファウスト」を10歳の頃には、読み終えていた。いえ、自慢話ではありません。マンガです、手塚治虫の漫画で読んだのです。

マンガかよってすって。小松左京氏に聞いてみましょう。

「ブルーストの『失われた時を求めて』の翻訳が完結した時に、しきりに僕が、感心すると、星新一がこう云った。

『べつに今読まなくても、いずれ手塚さんがマンガにしてくれるよ』『けだし名言』と僕は膝をたたいた

ものである。」

昭和二十年代からの初期作品、例えば、鉄腕アトムの誕生物語「アトム大使」、逆立てた髪もりりしい「リボンの騎士」続編「サファイア姫」。

SFなら、「ロストワールド」「メトロポリス」、面白い上に、ぎなた読みを子供に教えてくれた「弁慶」(スマホで調べて下さい)。

時代劇なら「丹下左膳」。後年、山中貞雄の傑作百万両の壺を観た時に、左膳の大河内伝次郎が、マンガそのものでした。いえ、手塚が10歳で観た映画を原作に描いたのです。

もちろん「ジャングル大帝」も「0マン」も。

その数、百数十冊が同居していた叔父さんの書庫に並んでおり、何時でも勝手に読めたのです。「火の鳥」だけを誉めちぎる人がいても、何時も静かに聞いていたものです。

叔父さんは人形劇、指人形作りの資料として、マンガを集め始めたのかもしれませんが、手元に残るのは、手塚マンガであり、他は人に与えてしまう。

実家に車で寄ると、箱一杯のマンガを何時も持たされるものだから、一度だけ大好きな「0マン」をね

だったことがある。渡された本には、手元に置くべき本の証しとなる林田金作蔵書印が押されていたのがうれしかった。懐かしい。

叔父さんの容態が悪い、癌で、ひと月持つかどうか、と連絡を受け、車を飛ばした時には思い出がふれて来ました。

学校から帰れば、叔父さんの指人形作りの傍らで、一日中、漫画を読み耽っていたこと。

そうだー漫画だ。こちらも五十を越えて、久しぶりに、叔父さんの蔵書印の手塚漫画が頭の中いっぱいに広がった。

私も、後から手塚マンガを全集で揃え出しましたが昭和20年代の単行本は、紙質は悪いが手がこんでいる。インクの赤いページがあれば青もある。総天然色ページが插まれる。

あの百冊余りの漫画を大事にしなくちゃ、独身だったから、引き継いであげなくちゃと思うと、体が熱くなりました。

叔父さんが亡くなって、部屋をいくら探しても、漫画は、人形までも見つかりませんでした。果然としました。私には幸福な思い出があると立ち直るま

で、随分掛かりました。

I LOVE FUJISAWA

堀 井 寛

境川の大道橋とクリスタルホテルの近くにある東恩田公園の前に建つ14階建のペランダが公園に面したマンションの6階に住居して25年になる。

公園にあったいづれも直径1メートルに近い桜の大樹7本のうち6本が根元から伐採され閑散とした感じになってしまったが、幼稚園児のにぎやかな遊び声が聞こえ、盆踊り、餅つきが催され住民から親しまれている公園である。

北陸の金沢、四国の高知市、都内の洗足、西小山、巢鴨、小金井、池上、神奈川の鎌倉雪の下、大磯、梶原、インドのカルカタ、アメリカ西海岸のロスアンゼルスと数多くの地で住んできたが、藤沢は住めば住むほど好きになる街である。

東京駅、新宿駅まで50分少々、片瀬江の島駅には7分で到着である。

小田急百貨店、さいかや、ビックカメラ、ドンキホーテ、名店ビル、安売りのオーケーは徒歩3分と買物が便利である。

四川料理の星都の麻婆豆腐、千里の蒸し餃子、甚五郎のランチ、フランス家庭料理のラ・シャンブル、銀座通りのイタリアン“アンチョビ”名店ビルの“海のカレーライスはやみつきになる。少し離れた本町郵便局に隣接の“松之屋”の鳥がらスープラーメンは、これぞラーメンという絶品である。

江の島々内のイル・キャンティカフェのスパゲティイは“真夜中のスパゲティ”というしゃれたメニュー名である。

江の島々内にある井上ではその日の朝取れの魚をランチで出してくれて美味しい。

市役所玄関口で湘南野菜のキャベツ、トマトの販売が行われている。

片瀬漁港と周辺では、大きさ7cm以上の湘南はまぐり、しらす等の魚貝が買えるのもよい。

西浜では年に一度誰でも参加出来る地引網があり

取れた魚がもらえる。

日大、慶応大学湘南藤沢キャンパスを含め4つの大学がある学園都市でもある。

秩父宮体育館、湘南台文化センターでは質の良い演劇、歌謡などが年間を通して催され文化度の高さを示している。

藤沢は湘南の中心地であり、気さくで、ちょっと気の利いているのが藤沢人の特徴であろう。

江の島々内の天然温泉スパで浴槽に浸りながら眼前に広がる絵巻物のような相模湾と雄大な富士山を眺める……こんな贅沢も藤沢に住むおかげと感じる……一瞬ひとときである。

その時代の流行りもの

松 本 実知子

(てっせん)

時は一九五八年、兄が中学生、私は十一歳の小学生で弟は一年生だ。乾麺の「チキンラーメン」が発売された。どんぶりに乾麺を入れ、熱湯を注ぎ数分蒸らせば食べられるという画期的な商品だ。子供たちの好奇心を誘うインスタント食品の登場である。早く食べたいと、どんぶりのふたを開けるのを待ちかねる我々兄弟の顔が見えるようだ。今ではカップ麺が主流だが、スーパールの棚には袋入りの乾麺もある。買うことはほとんどないが。

次に思い出すのは「少年マガジン」だ。弟が読んでいた漫画雑誌である。兄や私も、毎月「少年」「少女」等の雑誌を各自一冊買ってもらっていた。しかし、弟の年代になると週刊誌、あるいは月二回発行の雑誌へと変わっている。何と無くだが、弟の頃から時代が変わった印象がある。因みに兄の愛読書で

は鉄腕アトム、弟のマガジンではゲゲゲの鬼太郎、巨人の星が印象的だった。何故か、自分用の少女漫画の内容は忘れてしまった。

次の流行りものにはミニスカートを取り上げよう。私が就職し、服も自分の給料で買えるようになったところだ。人気モデルのツイイギーの来日でブームは盛り上がり、佐藤栄作首相の夫人まで渡米時に着用したと話題になった。

次の思い出は、任天堂のファミコンだろうか。ドンキーコング、ドラゴンクエスト、スーパーマリオ等だ。長女が五年生で長男が幼稚園児だった。娘の方は周囲の子供たちがやっているからやってみようかという程度だったが、息子の方はそれからどっぷりゲーム漬けとなってしまった。特にストリートファイター等の格闘ゲームには熱中していた。

スーパーマリオの人気はそれから長く続いたように、二〇一六年のリオオリンピックの閉会式に、安倍首相がマリオの扮装で登場し世間を驚かせた。

時代は移り、今では流行りということを超えてパソコンやスマホの使用が当たり前になってしまった。確か、我が家にパソコンが登場したのはウ

インドウズ98からだ。

いまだにパソコンを理解しているとは言えないし、最初はネットという概念が想像できなかった。スマホも使いこなしているとはとても言えないが、無くてはならない存在になってしまった。

後期高齢者の今、昭和、平成、令和と振り返れば覚えきれない程多くのことがあったのだと、感慨深い。しかし、この変化のスピードについていけないと、努力を放棄することはできないのだろう。後は進化したAIが、親切に手引きしてくれるようになるのを待っている。

この街に住んで

儘 田 加寿子

はじめて、東海道線の辻堂駅から、バスに乗って、トンネルを抜けると、景色が一変し一面に団地が広がりがり、驚きました。

上越新幹線は、トンネルを抜けると、雪国であつ

たが、ここは、団地だねと息子と話しながら、丘陵地帯に広がる、たくさんの方々に団地に大きな感動を感じました。

「お母さん、湘南に住んで、みようよ。なんとなく、湘南は開放的だし、空の色の青さは、ロサンゼルスのように青いし、海も近い。風も涼しい風が吹くから、ぼくはこのエリアに住みたいなあ」と言いました。

外に出れば、晴れた日には富士山と大山が見え、春には、ウグイスの鳴き声にききほれ、今までと、ちがった環境にも、興味がわきました。

そして、藤沢に引越してきました。

今では、永く住んでいるような気がします。

毎週、木曜日の朝、開催されている「公園体操」に夫婦で参加しています。そこでのおしゃべりは、楽しいひとときです。

「ちょいと鎌倉へ」

夢 実 香

まるで自分の住む町のように鎌倉を闊歩したいと最近考えるようになった。コロナ禍で不要不急の外出制限が出された時に、父のお墓があるからという理由で鎌倉ばかり出かけた。それまでも鎌倉は身近な場所だったが、見え方感じ方が違ってきた。

生前にこの地にお墓を選んだのは、父なりの理由があったそうだ。春には桜が咲き乱れ気持ちよく訪れることができ、お墓参りの後は鎌倉散策ができるように皆がお墓参りをしやすいように、と考えたのだと母から聞かされた。そしてまったく父の思惑通りになった。大船駅で横須賀線に乗り換えて鎌倉駅で下車。そこからバスで霊園に向かう。お参りが終わると、バスには乗らずに歩いて鎌倉駅まで戻る。途中に杉本寺、報国寺、浄明寺などがあり散策には事欠かない。古民家を改築したレストランやカフェも多くあり、私にとって心も体も満喫できる場所にな

っている。

特にいま夢中になっているのはハイキングコースをめぐることである。三方が低い山に囲まれた古都鎌倉。鎌倉ハイキングコースは四季折々の表情でハイカーを楽しませてくれる。ハイキングコースの途中に切通があつたり、歴史に触れる石塔ややぐらに出会えたりもする。大仏・葛原岡コースは大仏切通、化粧坂切通があり源氏山公園、源頼朝像を訪れ縁結びの葛原岡神社がある見どころ満載のコース。急な石の坂や滑りやすい箇所もあるが、初心者でも十分に歩けるコースだ。昨年惜しくも閉店した天空のカフェもコースの途中にあり、何度か足を休めた。天園コースは明月院横の道から、建長寺から、瑞泉寺からの入り口といくつもの入口があり何度でも楽しめる距離のあるコースだ。紅葉の季節は、圧倒的な紅葉に埋もれて歩くことができる。ハイキングコースはいくつもあるが、台風の影響により倒木や地滑りで通行止めになることもあり、出かける前はよく確認が必要だ。今年は四月に通過再開となった祇園山コースを楽しんだ。東勝寺跡、北条高時腹切りやぐらから八雲神社までの比較的短いコースだ。現在

も通行止めの釈迦堂切通の再開が待ち遠しい。

歴史的な側面でも鎌倉は面白い場所なのだが、にぎやかな町の中からスツと自然の山の中に入れる不思議さと、古い時代に思いを馳せて自分がどこに生きているのかわからなくなるような感覚が好きなのかも知れない。コロナ禍であつてもここではマスクを外して、思い切り緑の空気を吸い込んで元氣を取り込んだ三年間。今は普通に山登りも行けるようになったが鎌倉ハイキングは定期的に行っている。いつ行つても楽しいからだ。もちろんお墓参りもかかさない。

では本日もちよいと鎌倉へ。

父の五十回忌

森 眞 彦

四月末頃に神戸に住む兄から、亡父の五十回忌の法要を時候のよい五月二十日に行いたいという電話があつた。両親の眠るお墓は、四国は香川県の丸亀

市にあるお寺の中にある。兄と妹は八十歳前後になるが、甥と姪を含めて七人参加する予定という。みんな神戸の近くに住んでいるので日帰りできる。私の方は日帰りは無理なので一人で参加することにした。最寄りの東海道線辻堂駅から丸亀駅までJR線を乗り継いで六時間位かかるので、二泊三日の一人旅ということになった。前日の朝に辻堂駅を出発して、過去に住んだことのある京都、大阪、岡山を経由し、瀬戸大橋を渡つて丸亀駅に到着したのは夕刻であつた。

丸亀は築城四百余年の丸亀城を中心として、かつては大いに賑わっていた歴史と文化の薫る町である。生後十年間住んでいた我が故郷である。生まれた家は古い落ち着いた住宅街の中にあり、両親の眠るお墓はすぐ近くのお寺、本行寺にある。久しぶりに生家のあつた街を歩いてみると、かつての住宅地が空き地になったり駐車場になったりしている。お寺の方も無縁のお墓が多くなっているようだ。ふと、お釈迦さまが遺された「すべては移りゆく。忘ることなく努め励めよ」という言葉が思い起こされる。

みんなが揃ったところで五十回忌の法要が始まった。まずは本堂でご住職の説経を聞き、みんなで焼香した。それからお墓の前に集まって法要を続けた。その後、お昼は揃って丸亀名物の骨付鳥を味わい、懐かしい町並みをみんなで歓談しながら散策した。ほんとうに久しぶりの楽しいひと時であった。

翌日は丸亀から再び瀬戸大橋を経由し、帰途についた。車中、いろんなことが走馬灯のように浮かんでくる。

戦後、核家族化が進み、地縁血縁関係が薄れてきた。そして少子高齢化や人口減少、都市部への人口集中が加速した結果、お寺の檀家の減少が進み、今あるお寺もかなりの数の消滅が予測されている。

今の日本仏教は「葬式仏教」と言われ、あたかも死者を供養する宗教のようになっていく。私たちにとって、お寺のご住職と話をする機会は葬儀と法要以外には殆どない。

お釈迦さまはその当時、修行者に対して「自分の遺骨の供養に拘わりを持つな」と言ったと伝えられている。お釈迦さまは一貫して、この苦難に満ちた

人生をいかに生きるべきかを説いておられた。日本の仏教も「葬式仏教」だけでなく、人々の悩みや社会の課題に答え、幸せになるための教えを説くという本来の役割を取り戻し、そして、お寺やご住職にも「道を示してくれる」といった期待に応えてほしいものである。

などと、考えているうちに辻堂駅に降り着いた。縁者とも会え、楽しく一人旅ができたことをありがたく思っている。

以上

藤沢宿ってどんなところ？

（江戸時代にタイムトリップ）

山下 一馬

東海道五十三次、江戸の日本橋から京都の三条大橋まで124里8丁（487.8km）に53の宿場があった。藤沢宿はその6番目の宿場で、江戸時代にお伊勢詣で東海道中で宿泊していた。選ばれた村人が旅費を集め、数か月かけて伊勢詣をしていた

が、むしろ3泊4日で行ける大山、江の島詣が盛んだったようだ。日本橋から保土谷宿まで約9里あり一日に歩ける距離を考えると「ほどよい」この辺りで宿を取るようになる。頑張つて権太坂を上つても1・3里先の戸塚宿に「とっ捕まる」と言われていた。大山詣の目的は「五穀豊穰」、鎌倉時代には頼朝が刀を奉納して文武長久を祈願したことから、長い木刀を奉納することもあった。ルートは幾つかあり、戸塚の不動坂から長後宿に行き、そこから大山詣でした。帰りに藤沢宿で一泊し江の島詣をする。藤沢宿は江戸から近い場所として人気があり、また交通の要所で遊行寺前を東に向かう鎌倉道、北へ向かう八王子道（滝山街道）、北西に向かう厚木道があった。戸塚、川崎宿以前に、1601年から清浄光寺（遊行寺）の門前町として栄えていた。東海道の遊行寺東側の江戸見附から藤沢本町を超えた西側の京見附、その間1・3kmが宿場町だ。人口4千人、総家数919軒で、旅籠45軒、本陣1軒、脇本陣2軒あった。当初徳川将軍家の宿泊する藤沢御殿があり徳川家康、秀忠、家光が1682年ころまで利用していた。江戸から旅をして来ると、江戸見附が宿

場の入り口となり、怪しい旅人はここで検問される。見附から遊行寺東側の坂を下ると有事の際、敵の勢いを鈍らせる柵形構造、防火の為の広小路にでる。大鋸橋の袂に高札場が設けられ、公定賃料（宿賃）、キリシタン禁制、走党廃止令等の幕府の重要法令が掲示されている。近辺に越前屋、角屋、正月屋、松木屋、植松屋、太和屋等の旅籠が並ぶ。諸大名、公家、幕府の重臣は本陣に泊まり、我々庶民は、米を携帯した木賃宿や食事を提供する旅籠、また飯盛女のいる旅籠に泊まる。飯盛女は当時一軒に2名まで許可された旅籠が22軒あったが、実際には107人の飯盛女がいて、遊女奉公させる風潮もあったようだ。宿場を管理する問屋場があり、坂戸と大久保の2軒が10日交替で人馬継立などを行った。人足100人、馬100頭を備え、飛脚人足の継立も担った。旅籠は高級宿で300文（約6千円）、安い宿で100文、また木賃宿は素泊まり50文に薪代もあった。食事は「一汁三菜」で焼き魚また煮魚が付いていた。境川に掛る大鋸橋（遊行寺橋）あたりに江の島の一の鳥居があり、江の島道約1里で江の島に向かう。江の島詣は風光明媚な島と富士山が望

め、海の幸を楽しみ、弁財天をお詣りする。江の島神社は江戸の親方、歌舞伎役者、花魁も訪れ、その人氣は浮世絵からもうかがえる。弁天様は女性の神様なので、「男女でお詣すると弁天様に妬まれるよ?」と言つて近隣の宿で遊興する輩もいたとか? それでは私もそろそろ宿をとり一杯やることにする。

「草臥て宿かる比や藤の花」芭蕉

思ひ出を夢につなげて

山田節子

掌に収まるほどの可愛い一刀彫の立ち雛は私の青春の思ひ出を秘めた宝物である。今から六十余年前、高校の修学旅行の初日に、私は奈良の老舗で二人に出会った。決められたお小遣いの大枚をはたいて買ったもので、あとの行程が少し心細かったのも、忘れることができない。白い木肌に繊細に描かれた伝統の彩りや佇まいは、あの日のまま、毎年春

の訪れを伝える役を果してくれている。

コロナ禍で延期されていた同期会が四年振りに開かれた。恩師や友達への黙祷のあとは、若い頃の思ひ出話に溢れる会場になった。たまたま私のまわりに、二十才記念にと富士山に登った思ひ出の花が咲いた。それは四人で、二日がかりの挑戦だった。梅雨明けを待つて出発した五合目までは静かな新緑の美しさを楽しみ、その後は火山特有の砂利の道をひたすら登った。七合目半の聖徳太子縁の山小屋に泊り、早朝登山に備えた。(この山小屋はNHKのニュースで夏の登山開始の朝毎に私の心に思ひ出を蘇らせてくれている。)暗闇をついて登り始め、頂上で御来光に真向った時の感動を皆が口にして、あらためて思ひ出の力をかみしめたものだ。火口を降りて万年雪を沸かして飲んだコーヒーにも感激したのだが、下山の時の武勇伝こそ、同行四人の大きな宝となっている。当時富士山測候所は建設途上にあつて、工事車輛が登山道を消すほどの凸凹道だった。(スカイツリーが活躍する現代では、その施設も麓で博物館として公開されている。)私達は膝まで埋もれながら、そのルートを注意深く、五合目迄駆け

おりたのだ。ころぶこともなく無事に、麓まで林道を楽しんだことを思い出すだけでも心若返るひとときになった。

私達世代は、戦中に生を享け、物心ついた時から、国中が復興にそして更なる躍進にと、まっしぐらな社会のもとで成長し、社会人としてすごしてきた。その幸せを宝物として出来る範囲で、それを活かすこれからにしたいという思い深くする秋の午後となった。

最初期の新幹線

山 成 健 治

昭和三十九年（一九六四年）十月一日、日本初の新幹線が東京と新大阪の間で開通した。その一週間後、当時、大学二年であった私は、同じクラスの仲間二人と共に、東京駅を朝九時に出発する新大阪行きの新幹線に乗車した。友の一人の郷里が松山市の郊外に在り、我々の大学が、この時期に開催された

オリンピッククの会場に使われて臨時休校となった為、級友三人で連れ立って、友の故郷・松山に出掛けることになったからである。

列車の中は、ガラガラであった。私ども他には数人が広い車内にポツン、ポツンと座っているのみであった。私は、日本で初めて走る新幹線に、多くの日本人は興味と関心を抱いているやに聞いていたので、乗車を希望していた人が大勢、乗り込んで来るのではないかと……とばかり、思っていた。それだけに、ガランとした車内を見た時には、些か呆気にとられた。しかし一方ではまた、「万が一、事故が起これば死は確実！」という報道も成されていたので、暫くの間は、“様子見”を決め込んでいた人たちが、実際のところは一番多かったのかも知れない……。

いよいよ新幹線が走り出し、徐々にスピードを上げていくと、紛れもなくそのスピードは、“異次元”のものであることが、すぐに分かった。従来の特急列車であれば、猛スピードで走る乗用車に追い越されることも無くはなかったが、この列車（新幹線）のスピードはまるで次元が違っていた。乗用車が、ど

んなに猛スピードで走っていようと、その乗用車が、まるで止まってでもいるかのように、一瞬の内に追い越してしまうからである。しかも、そんな猛スピードで走っているにもかかわらず、列車内は音も静かで、揺れも、さほど感じないのである。

予定通り、三時間十分後には新大阪駅に到着した。時刻は、正午を少し回ったばかりである。従来であれば、朝、東京駅を出発しても、大阪駅に到着するのは夕刻であったが、これからは、真昼には大阪駅に到着することが可能なのである。東京・大阪間の移動が、それまでの一日から、これからは半日で可能となったことを体験できたことは、大変貴重であった。何故なら、高度経済成長時代を迎えていた我が国において、「名状し難い何か」が、今、確実に起こっている……」ことを、実験的に学ぶことが出来たからである。

予感していた通り、新幹線登場後の日本は、高度経済成長路線を“まっしぐら”に進むこととなった。

ロボット博士 森政弘先生

横 田 佳代子

1987年、スタンフォード大学で、国際平和会議が開催された。森政弘先生の講演が終った時、「面白かった」「素晴らしい」と称賛の声があふれた。その時のカセットテープを大切にしていたが、最近、友人達に依頼して、CDにして森先生にお届けした。

森先生は1927年三重県生まれ、小学校時代から工作を好み、中学校に入ると真空管に魅せられ、将来は電気技術者になろうと志ざした。そのため自宅に工作室を持ち、そこに閉じこもる毎日が続いた。名古屋大学に進学、1959年、東京大学助教授。1969年、東京工業大学教授。1987年名誉教授。紫綬褒章 勲三等旭日中綬章受賞。

中央学術研究所で、5年ほど毎年、論文を発表する機会を頂いた。森先生に温かいご指導を頂いた。先生はいつも明るく、にこにこしておられ、自然体

で、みんなに好かれていた。発表させて頂いた時、会議の総括をされていた森先生が、壇上から、「ヒマラヤ・ラダックまで行って、女性が、識字教育を応援することは、元気があつて、素晴らしい」と、お褒めの言葉を頂き嬉しかった。

2012年、雑誌のインタビュに答えられた。

「美しく老いるためにどのようなことが必要でしょうか」という問いに、「美しい心を持つこと。心を磨く勉強をしなければ、美しく老いることはできません」

「年齢を重ねて、ますます心を自在に悠々と生きておられますが、その秘訣は」

「今、心がけているのは、捨てることです。今まで持っていた価値観や物を捨てる。20年間使い続けた旋盤（工作機械）を、友人に差し上げたら、執着が消えました」

2018年「ロボット工学と仏教」を出版された。工学博士の森先生はロボット工学の先駆者であり、ロボットコンテストの生みの親として知られ、仏教にも造詣が深い。森先生は、「ロボットに対する、人間の作法、人としての心遣いや配慮、そして

ロボットから学ぼうという姿勢が必要」「ロボットにも仏の命が宿っている。尊さは、ロボットも、人間も同じ」と述べられる。

2021年、お元気な先生が、テレビ「こころの時代」で、対談されました。宮崎から世田谷に転居され、整った広いお部屋で、にこにこ話される先生は、素敵でした。「仏教では自然と書いて自然（じねん）と呼ぶ。自然の状態にみんながなることが、地球が救われる元だと思います。ゲーテも言っています。「人間は大切なものを忘れている。自然に対する畏敬の念です」

森先生を尊敬しておられる恩師が、森先生のお言葉を紹介された。「ぼくたちの生命は永遠の過去から、永劫の未来へと受け継がれてゆく。宇宙の大生命そのものがぼくたちの命なのである。そして同時に宇宙の一切合切がぼくたちの親戚なのだ」心に響く言葉です。

一話一句

吉田 邦男

時雨

あれは、大学をやめて左官見習ひのやうなことをしてゐた頃だ。その日は肌寒く朝方は小雨が降つた。仕事を少しはやく切り上げ帰宅することにして、現場を片づけ、道具をしまつてトラックに乗り込んだ。エンジンをかけると、ラジオからニュースが流れて来た。『作家三島由紀夫が自衛隊の市ヶ谷駐屯地に入り、自衛隊員の決起を促したがかなはず割腹自殺をした』たしかこんな内容だつたと記憶する。帰路は市ヶ谷からなるべく遠い道を選んだつもりだったが、交通規制と渋滞に遭ひ帰宅がひどく遅れた。テレビでは早速特集が組まれ、翌日からは新聞雑誌等で詳細が報じられた。

あの日、三島は月刊誌「新潮」に連載してゐた「天人五衰」の最終原稿を書き上げ、新潮社に郵送し、「楯の会」の会員と市ヶ谷に向かつたさうだ。原稿

はきれいに清書されてゐて筆の乱れはなかつたと云ふ。

大学はやめたが、文学への思ひ捨てがたく「新潮」だけは定期購読してゐた。師走の雑踏の中にある小さな書店で、「新潮」を受け取つた。店主は『たくさん仕入れやうと思つたんだが定期のこれ一冊だけ』と渋い顔で渡してくれた。大書店が買い占めてしまったのだらう。

三島のそれは一月号の巻頭に遺稿として載つてゐた。あれから五十余年、今年も十一月二十五日がやつてくる。三島忌・由紀夫忌・憂国忌と云うさうだ。

時雨るるか三島由紀夫の後ろ影